

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢
第3号(2016年度) 2017年3月発行

大学教育センター・授業研究 (FD 研修) の記録

大学教育センター・授業研究（FD 研修）の記録

本学では、授業改革の一環として授業の可視化を目標のひとつに掲げ、昨年度より大学教育センターを中心に授業研究を実施している。

この授業研究は、我が国において明治以来、特に初等・中等教育の現場で実践されてきた手法であり、教員の実践力向上に大いに寄与してきた。同様の科目を担当する教員同士にとどまらず、異なる科目の授業においても授業実践を交流させ、授業後の検討会などで批評を展開することによって授業者自らの課題をフィードバックするとともに、学修者の実態に関する認識も共有しつつ、授業実践自体を研究の俎上に載せていこうとするものである。そうすることによって、授業改善の方策の視界が広がってくる。

本年度は、英語 2 回と初修外国語（中国語） 1 回の授業、計 3 回の授業研究となった。英語（Ⅰ）、中国語（Ⅰ）はそれぞれネイティブの教師、英語（Ⅱ）は日本人教師による授業である。共通基礎教育における外国語の指導理念が、学生実態を考慮に入れながら、授業の中でどのように具現化されようとしているのかが、浮かびあがってくる。

これからも、このような積み重ねによって本学の広範な授業改善が進むこととなる。

平成 28 年度 第 1 回授業研究会（第 1 回 FD 研修）

日時：5 月 19 日（木）3 限（13:00 ~14:30）

場所：1 号館 01109 教室

授業担当者 Jason Lowes 講師

授業科目名：英語（Ⅰ）

参加者：大塚、劉、津田、前田、趙、Peculis、Sellers、日暮

This lesson contained many elements that are common to how I approach most classes. Firstly, I connected this lesson to the previous class through a quick review of the vocabulary that was previously learned. Instead of just repeating the words or once again telling them what the words mean, I had them retrieve the information within their own memory in a very controlled (two option) activity. The underlying circuits for retrieval differ to those of input memory, so I consider rapid retrieval to be a



foundational skill toward developing fluency. A second aspect of memory that I considered is the role of spaced repetition toward improving the consolidation of memories. To encourage students to review the material at some intermediary point between the previous lesson and the current lesson, I set a short quiz to take place in the lesson. I also remind the students via Cerezo that they will have a quiz. It is my hope that they will restudy the words a couple of times between classes. The interleaving of material is something that textbooks do poorly. Most books push forward with new material and do not revisit previously studied material enough times to encourage secure acquisition of the new language forms. This is something that teachers must do.

In the second phase of the lesson, I introduced some key questions from the textbook to and had the students match them with their Japanese meanings. The goal is to move from the Japanese meanings (knowledge that the students already possess) to the equivalent structures in English. Then, via a quick on screen drill, the students were able to practice / confirm their comprehension with immediate feedback on their understanding. Through a series of drill activities, the students progressed from demonstrating receptive competence to be able to exhibit productive competence. At the close of this phase of the lesson, the students have manipulated language and have had significant opportunity to produce it within very controlled contexts.

The third phase of the class has the students use the language to create original contexts that are personally meaningful while using the language forms already covered within this lesson as well as previous lessons. To model the goal that the students were to emulate, the students practiced using a conversation from the textbook. With some practice done, the students were then given the task of producing their own conversation. The conversation was to include several of the question/ answer pairs practiced within the lesson. They were also informed, prior to creating their conversations, that they would perform their conversation for other groups. They were also strongly encouraged to perform the conversation rather than to simply read the conversation they have written. Most students were able to successfully perform their conversations.

The students were informed at the end of class that they will have a short quiz on these contents in the subsequent lesson. They will also be asked to perform their conversation for other groups in the next lesson.

This lesson went smoothly. Much of the credit for the ease of moving from one task to another and the positive outcomes of the lesson lies with the excellent group of students from the pharmacy faculty who make up this class. They carry a sound basic knowledge of English along with an overall positive attitude toward second language learning. To make other classes run as smoothly, I do think that a combination of sound fundamental knowledge (not mastery, but some basic



knowledge) in conjunction to a positive attitude toward language learning need to be fostered. As teachers at Fukuyama University, I consider those two be paramount toward establishing successful language program.

第 1 回授業研究検討会まとめ

日時：5月19日（木）14:40～16:00

場所：学習支援室（1号館 01322 室）

参加者：Lowes、中尾、劉、若松、前田、津田、趙、劉、若松、Tang、Peculis、Sellers、日暮

観察者：今日の授業についての説明をしていただきたい。

授業者：今日の授業の学生は、他のクラスよりレベルが高い。このクラスはみんなレベルが上の同じクラスで、楽しくできている。

今日の UNIT 2 は、どう質問するか、UNIT 1 はもう少し簡単で、ほとんどできるというアンケート結果であった。今日は、メモを使ってもよい



こととした。今日は、前回の復習、次のスピーキングテストの練習も行った。最後は、会話の文章を作らせたが、説明が少し足らなかった。一番の目標は、楽しく英語を勉強すること。中学・高校で英語が嫌いになっている。最後にコメントを書いている。

今日の授業は、英語を使うこと、楽しく勉強することが目的である。

観察者：今日何かほかに難しいことはあったか？

授業者：自分で絵を描かせたことである。遊びの要素で絵をかかせたが、授業であるので、まじめに書こうとしてしまう。

観察者：そこはすごく促されていたように思う。

授業者：学生の何人かは真面目に考えてしまう。

観察者：授業研究のために参加したが、自分も勉強できたので楽しかった。感心した点は2つある。3限の講義で、眠気に誘われやすいが、いろいろなゲームを入れて、積極的に参加させた点と、いろいろな方法で前回の授業を復習させている点であった。

気になった点は、一つは、字が小さくて見えにくかったように思う。二つ目は、今日は TA がせっかくなるので、できれば学生との会話の練習をさせたほうが良かったのではないだろうか。

授業者：今日は、授業研究であったため、TA を利用するのはどうであろうかと考えたため、使わなかった。いつもは学生と会話をさせている。

観察者：テキストは、これは薬学部の学生対象の講義だからこのテキストを使用したのか？

授業者：看護学部が使っているテキストを使用している。

観察者：自分自身も受けてみたいと思う授業であった。テキストを読むだけでなく、聞いて、話がで

きる授業であった。

授業者：TOEIC などの資格取得を目的とした授業は、その目的のための授業をしたほうがよいが、今回は、英語を理解する、話すことができる授業が良いと考えている。

	Ms. Wada	Mr. Akira	Mr. Hamaguchi	Mr. Sato	Ms. Hamaguchi	Mr. Tomita	Mr. Ishikawa
How did you sleep last night?	Not so good.	Alright.	Not so good.	Alright.	Not so good.	Alright.	Not so good.
Have you taken your temperature ?	Yes, it's 37.8°	Yes, it's 37.8°	No, not yet.	No, not yet.	No, not yet.	No, not yet.	Yes, it's 37.8°
How long have you had this feeling?	For two days.	For two days.	Since last night	Since last night	Since last night	Since last night	For two days.
Where does it hurt?	In my left arm.	In my stomach.	In my stomach.	In my stomach.	In my left arm.	In my left arm.	In my stomach.
Do you have any other symptoms?	Yes, I have a headache.	Yes, I have a headache.	No, nothing else.	No, nothing else.	Yes, I have a headache.	No, nothing else.	No, nothing else.

観察者：プリントのテキストは自分で作成しているのか？

授業者：毎回自分で作成している。

観察者：プリントに書いてあるキャラクターについては？

授業者：キャラクターは毎回一緒であるが、会話の内容が変わってくる。

観察者：簡単と思うが、学生は達成感を感じられているのではなからうか。

観察者：学生は、暇がないほど忙しかった。おしゃべりや居眠りする暇がなくてよい。

最後にコメントや評価を書くのもよい。机上の名札に書いてあると、誰が書いたかすぐ分かるところもよいと感じた。

観察者：今日のような授業は、受講者が多い授業ではできないのではないか。

授業者：メモを作って、特に気になる学生について、見るようにしている。70人、80人になると確かに難しいが、できないことはない。

観察者：説明をすると、学生が分かりにくい。

授業者：二人組で設問が難しいものも確認をさせている。

授業者：座席が固定されている階段教室ではなかなか難しいと感じている。

観察者：最後の会話で、質問と会話がつながっていた。

観察者：学生は、長い会話はできないが、今回は、自然な質問を作れるようになった。

観察者：じゃんけんについては？

授業者：じゃんけんはよく使う。学生から自然に会話ができると考えている。

観察者：次から次へと進んでいき、学生が次は何をするんだろうと考えている。大変魅力的な授業で

あった。工夫がたくさんされていた。

授業者：だいたい1つの作業を10分くらいで考えている。

観察者：今回の授業で到達したい目標が、はっきりしたほうが良かったのではないかな。楽しく、たくさん会話をするのはよかったが、それを学生に意識づけさせるものがあったほうがいいのではないかな。

授業者：最初に説明を学生したほうがいいだろうか？確かに足りなかったかもしれない。

観察者：同じ科目名の授業を他の教員も担当しているが、授業の内容等についての目標設定等は共有されているのか。

授業者：前は行っていたが、教員によって授業のやり方が違うので今はしていない。また、レベルの違うクラスなので、到達目標も異なるので同じことはできない。しかし、テストについては他の教員と情報共有や相談をしている。また、今年から、英語のテストは全員同じものになっている。

観察者：完璧なテキストというものはあるのだろうか？

授業者：それはない！しかし、だんだんと改善を行ってより良いものを作成できてきている。今後もより良いものを作るつもりである。

観察者：例えば、山口大学は TOEIC に特化したテキストを全員使用している。そのため、目標は同じであるが、しかし教員側にやる気が出ない場合がある。すでに高校に入ってきている「セファール」、文科省から大学生は B1 レベル（～できる）、というのがトップダウンしてきているが、福山大学はまだである。先生方の個性のある授業、教員も楽しくやる授業のほうが、やはり良いのではなかろうか。

観察者：いろいろなアドバイスをいただいた。良いか悪いかわからないということもあるが、もっとよい授業を行いたい。いつでも授業を見にきていただきたい。

平成 28 年度 第 2 回授業研究会（第 2 回 FD 研修）

日時：6月27日（月）2限（10:30～12:10）

場所：1号館 01105 教室

授業担当者：劉国彬准教授

授業科目名：中国語（I）

参加者：大塚、中尾、竹盛、津田、前田、岡、中山（戸手高校）、日暮

「中国語 I」は、初年次共通教育としての初修外国語科目の選択授業である。この授業の目標は「簡単なコミュニケーションを行う方法を習得するとともに、HSK1 級と 2 級（中国政府が実施する資格試験）に合格する実力をつけることを目指すために、中国語発音の基礎ピンインを学び、中国の簡体字を覚え、基本的な文法をマスターすること」である。

その目標を達成するために、15回の授業で、まず、授業の最初に先生と学生はお互いに挨拶をする。挨拶終了後、前回の授業で分からなかった点（分からなかった点は出席カードの裏に書かせている）を説明する。これを通して、ポイントの復習をすることができる。次に、中国語の声調を正しく

するために、学んだ内容を音読する。この方法で復習終了後、新しい授業に進む。

まずPPTを使って、新出単語を説明し、学生に覚えさせる。次に文法説明する。そして、文法の理解と定着をするために、映像を見せる。映像を通してリスニングの練習もできる。勉強したポイントをミニ会話グループでミニ会話行う。最後に、前回習った課の会話文を暗記テストと書き取りテストを行う。暗記テストは、学生に一組ずつ教壇の前に来てもらって、暗記発表させる。全員の発音を確認してから、学生は書けるかどうかを確認するために、発表した内容の書き取りテストを行う。こうして、繰り返すことによって、学生の中国語のレベルを少しずつ上達していく。

例えば、キャンパスで会ったら、「老师好！（先生、こんにちは）」「老师再见！（先生、さようなら）」など、明るく挨拶をしてくれる。また、多くの学生はHSK1級または2級を受けている。



第2回授業研究検討会まとめ

日時：6月27日（月）12:20～13:00

場所：学習支援室（1号館01322室）

参加者：劉、大塚、中尾、竹盛、津田、前田、岡、中山（戸手高校）、日暮

授業者：この授業はみんなゼロからのスタートである。4月から5月までの間に発音の練習に力を入れてきた。そのせいでシラバスより授業が少し遅れているが、かなり発音ができるようになった。できれば学生が単語の意味を一目瞭然で理解できるようになるようになるといい。また、だんだん発音が理解できるようになってきている。

授業の展開を黒板の左側に書いている。そして、毎回授業のコメントを記入してもらっており、前回の回答をしている。今回は質問が少なかったが、多いこともある。

観察者：初めて中国語の授業に参加させてもらった。分かりやすい授業であったと思う。最後にペアで練習を行っているのがいいと思ったが、その際に学生にはどのようにアドバイスをしているのか？

授業者：学生にAとBに役割分担をさせて練習し、次に役を交代して会話の練習をさせている。その時に、発音が間違っていることがあれば、個別にアドバイスをしている。会話を確認させ、練習させて、実際に使えるようにさせるようにしている。

出席カードについては、最初出席をとって



るが、確認のためと裏にコメントを書かせるために配布している。コメントはみんな書いている。

観察者：ペアは決めているのか？

授業者：決めていない。自由に友達同士でペアを組ませている。そのほうがリラックスできると考えている。

観察者：ペアが変わることはあるか？

授業者：今回3回目であるが、変わっていない。暗記ができたペアから前に出てきてもらい、会話のチェックを行っている。

観察者：その場で学生の理解度が確認できてよい方法であると感じた。

観察者：多人数の授業の中で個々の習得状況を確認するにはよい方法であると感じた。ペアで練習させているときに、終わった学生がどうするかという問題があるのではないか。その時に、マイクで音声を拾って他の学生に聞かせるのはどうか？

授業者：今までは、終わった学生には、書く練習をさせていたが、その方法もよいと思う。

観察者：ドラマのようにさせてみるのはどうか？そうすると体に身につくのではないだろうか。聞いているほかの学生もやる気になるのではないか？

観察者：文法が非常にわかりやすかった。ペア練習には感心した。なかなか恥ずかしいので発音練習はしない学生もいるが、先生の前で練習するのはよいと思う。

観察者：発音練習に対し、文法練習が少ないと感じた。学生の理解がもう少し足りないかもしれない。間の取り方にも工夫が必要ではなからうか。質問を学生に投げかけて、学生が答える前に回答をしてしまう。待つことも必要ではなからうか。学生の回答があるかもしれない。難しい発音の単語は、以前に練習した単語も復讐し、繰り返し練習させたほうがいいのではないか？

観察者：前半は、流暢な授業であったが。言い方を変えれば、抑揚がないと感じた。しかし、最後の練習はよかったと思う。学生によって到達度の個人差はあるのか？

授業者：もちろんあるが、前回ではできなかったが、今回はよくできているということもある。そこは注意をしている。シラバスより進度が遅れているので、どうしても進度が早くなってきている。

観察者：英語とはスタンスの違いがあるということを感じた。授業の導線を黒板に書いてあることもよいと思った。また、素晴らしいと感じたのは、聞かせる、書かせる、読ませる、話させるの、4技能を行っていることである。最後のペアでの会話の時に、他の人にも聞かせたほうがいいのではないかと思った。文法では、日本語と中国語の違いや共通性、英語と中国語の違いや共通性など、言語比較を行ってはどうか。


授業者：今日はしなかったが、英語だったらこう言うという説明をすることもある。


観察者：一斉に発音させるというのもよいが、個別に練習させるのもよかった。文法については、発音を先にやらないと進まないこともあるので、やはりこのくらいの進み具合だと思う。

観察者：繰り返し発音させることで、学生の自信につながり、自発的に口に出してみようとする姿勢が出てくるのが良いと感じた。

会话1

A: 请问, 你叫什么名字?

B: 我叫姚明 (Yáo Míng)  你呢?

A: 我叫阿部宽 (Ā bù Kuān) 。你是中国人吗?

B: 是,我是中国人。你呢?

A: 我是日本人。

5

授業者：学生と一対一で対応するので、学生との距離が近づく。それで、講義以外の時間でも中国語であいさつをするようになった。

観察者：とりあえず中国語に慣れる、中国語が好きになるということに成功しているのではなかろうか。初修外国語については、まずその言語が好きになるという気持ちにさせるのは大事ではなかろうか。繰り返し、練習をさせるのが良いと感じた。独自にプリントを作成して、身近な人の名前や知っている人の名前があったのは、よい勉強になると感じた。

授業者：前の授業は、オバマやトランプ氏など有名な名前を出したりした。

観察者：私の高校の生徒はなぜ中国語を選択したかというと、K-POPのタレントに好きな中国人がいたので、興味を持ったと言っていた。

観察者：歌はリズムとして覚えるので練習するのによい。日本人にとって難しい発音が入っている曲もあってよいと思う。

授業者：文法を説明するのに、まず名詞、形容詞を説明する。日本語で書いて、中国語でどう書くかという説明をすることもある。

観察者：小テストは、一人で採点している学生もいたが、二人ができないようであれば、三人で回したらどうだろうか。

授業者：平常点に入れるつもりで小テストを行っている。発音のテストについては、点数をつけている。

観察者：授業の雰囲気が大変良かった。学生も安心して受けているように感じた。

観察者：我々も最後の展開には、大いに刺激を受けた。

平成28年度 第3回授業研究会（第3回 FD研修）

日時：10月25日（火）4限（14:40～16:10）

場所：1号館01212教室

授業担当者：中尾佳行教授

授業科目名：英語（II）

参加者：大塚、地主、劉、竹盛、津田、前田、岡、日暮

本授業、英語(II)は、一般教育、必修科目の英語の一つである。英語(I)が一年生前期、本時の英語(II)が同年後期、英語(III)が二年生前期、英語(IV)が同年後期に開講されている。英語(III)、(IV)は薬学、工学、生命工学、経済、人間文化の専門英語へのブリッジとして設定されている。英語(I)、(II)は、専門性に囚われず、英語の4技能を中心にその基礎的な知識及び運用力を向上させることが目的である。入学直後の英語診断テストで、学生



の英語習得段階は、初歩、中級、上級に分けられるが、本授業の受講生は、中級に位置付けられ、人間文化、生命工学、工学に所属する45名からなる。毎授業後に回収する質問・コメントから判断すると、英語や言語への問題意識の高い学生が10名程度いる。将来教員を目指している学生、情報工学などをキャリアとして考えている学生のいることが、4分の1程度ではあるが、このような問題意識の高さに関係するのかもしれない。本授業は技能の向上が中心であり、テキストは **Pathways: Foundations**(Cengage)を使用している。しかし、毎時間<教養>に関わるものとして、10分間程度最近の言語科学の発見を、具体例を交えて紹介している。本授業は前期から繰り返しく教養>的側面として、日本語の認知パターンと英語の認知パターンの違いを取り上げ、ワークシートを用い、学生が問いに答えていく形で、徐々に演習してきた。本時では、既に取り上げていた著名な演説(黒人差別の廃絶を唱えた Martin King Jr 牧師の” I have a dream” (1963)、世界平和を訴えた Barack Obama アメリカ大統領の広島での演説” Death fell from the sky” (2016))と日本文学作品(宮澤賢治の『雨ニモマケズ』(1931)、川端康成の『雪国』(1948))の英語翻訳を扱った。それぞれの文献の語彙や文法については、既にテキストに注釈を付け説明しておいた。本時は、「日本語から英語を、英語から日本語を学び返す(Unlearn) : 「<誰が>(動作主) ~する」、その<誰が>をどう言語で表す?」をテーマとした。

日本語は、Iモード(Interactional mode of cognition)、英語はDモード(Displaced mode of cognition)を中心とした認知モードに依拠し、それは言語構造の多岐に渡って投影される。日本語では、事態を当事者・臨場的に認識し、動作主ないし主語は互いに分かっているものとして省略されやすい。他方、英語は、事態を当事者としてだけでなく、同時にその当事者に距離を置き他者としても認識し、かくして動作主ないし主語は言語化される傾向がある。「雨ニモマケズ」の英語翻訳は、” Strong in the rain”、あるいは” I will not give in to the rain.” とすべきか。日本語では動作主ないし主語は暗黙知。英語のそれは” I”、” He”、それとも” You” なのか。

授業評価は、語彙と文法・語法の英語(II)の全学共通テスト(40%)と私の授業の個別テスト(60%)からなる。この60%に<教養>面の問題を一題含める予定である。



第3回授業研究検討会まとめ

日時: 10月28日(金) 12:20~13:00

場所: 学修支援相談室(1号館01322室)

参加者: 中尾、大塚、地主、竹盛、前田、岡、若松、Tang、日暮

授業者: 日頃は教科書を使用し、語彙や文法構造等を基本的に教えている。しかし、そればかりでは

単調になるので、近年の言語学の発見とでも言うべきネタを1回の授業に10分程度紹介している。その一つが、動作主、つまり、「誰が何をやる」の〈誰〉をどのように日本語で、あるいは英語で表しているかを考えてみよう、というもの。このことを考えることで、学生に「学ぶことを学ぶ」、学び方を学んでほしい、と期待している。たとえば日本語は分かっていると思っているかもしれないが、外国語を学習することで、様々な疑問が浮かび上がってくる。日本語にこだわっていく



と、内言、つまり、思考するための言語が広げ、深められていく。このように内言である母語を深めて外国語を学習するとき、今まで以上にその外国語を多面的に見ることができるようになる。そのことが、最終的には自分の中に他者性を広げていくと期待している。言葉が豊かにならないと、他者性(人の立場に立って考える、異文化を持った人の立場から考える)は広がらないと思っている。いつも10分程度行っていることを、今回は、その部分をまとめて行った。

反省としては、自分中心の授業になってしまったことである。ピア・クリティシズム (peer criticism) といふか、隣同士が会話するような時間とか、全体の中から意見を聞いてみるとか、フィードバックするとかいうことをしなければいけなかった。一部、”I have a dream” の演説を扱った時「5年後に何になりたいか」を考えさせた。キャリア教育を強く意識したわけではないが、他人事ではなく自分のこととして考えさせたかった。学習というのは、教えたことがすぐに分かってすぐに使えるというものではない。学生の感想をまとめたプリントをこの後配布するが、学生はIモード、Dモードというものはよくわかっていない。しかし、この言葉にはひっかかっている。もしかしたら、私が3回4回話し続けていくと、どこかでそれがピンとくるのではと期待している。1年後2年後になるかもしれないが。そういったキーワードを記憶に留めるということも大事ではないだろうか。

観察者：簡単な単語の意味も理解できていない学生が、英語ばかりの教科書を読む努力をするであろうか。

授業者：毎回ワークシートを作成している。リーディングとライティングが少しでもわかりやすくなるよう、教材に注釈をつけている。そのワークシートに授業中に記入する作業をさせている。それでも、十分ではない。中級のレベルのクラスではあるが、学生にかなりの学力差がある。

観察者：テキストは、中級クラス用のテキストか？

授業者：Pathways シリーズでは、一番簡単なテキストである。ほとんどSVOの単文形成である。環境問題や教育問題などの社会問題がやさしい英語で書かれている。毎回、前回扱った箇所を、ディクテーションをして復習している。

観察者：今回行った授業の内容は、テキストに含まれているのか？それとも別のものか？

授業者：今回はテキストとは別のものである。先ほど申し上げた10分間のネタである。観察者：英語のテキストは、教員によって違うのか？

授業者：テキストは授業者それぞれが選択している。

観察者：テキストには”Dream”が、そのまま載っているわけではないのか？

授業者：”Dream”はPathwaysのテキストにない。私が投げ込みで入れたものである。オバマさん

の演説については、前期にレポート課題で翻訳をさせている。その時に動作主をどう表すかということを考えさせた。演説の内容については、学生はレポート課題で既に確認している。そのうえで、なぜ自動詞 (“Death fell from the sky.”) なのか、なぜ “We” なのかと、今回焦点を定めた形で考えさせた。

観察者：オバマさんの演説については学生が既に学んだということで、ある程度理解はあるのだろうが、非常に興味深い内容ではあったが、盛り込みすぎて学生が理解できているだろうかという懸念を持った。しかし、既に内容について学生は理解しているということで納得した。まさに、大学の授業らしい英語学の本格的な授業であった。教材研究も時間をかけられているだろう。しかし、その一方で、学生が読んだり発音したりという時間がもう少しあったほうが良かったのではないだろうか。前回の Lowes 講師の授業は practice 中心で、学生と話をする、学生に話をさせるというタイプの授業であったが、それとは対極にあるように感じられた。その中間的な授業はできないだろうか。

授業者：今回は、私の授業の中でもまとめのようなことを行った。日頃は 10 分くらいの投げ込み教材を行っている。主観的ではあるが、私が楽しめる授業を行いたい。そして、発見的な喜びというか、楽しさを感じてもらいたい。理想的には、学生がいろんな先生の授業に参加できるとよい。

観察者：学生は英語の授業をいくつも取るわけにはいかない。そうすると一人の教員しか知ることができない。しかし、先ほども申し上げたように、思想や明確なメッセージを、英語教育を通じて学生に伝えたいということはよくわかった。それはひとつのいいパターンではないかと感じた。

授業者：外国語は、見た感じ一平面のようだが (言語の線状構造)、その意味合いは多次元的である。(多次元的なものが一平面に落とし込まれている。) この点をしっかり認識できるようにもっていかなければ、学生たちの生きる力につながらないと思う。そこで、「誰誰が・・・する」の誰、つまり動作主が、言語 (英語では、日本語では) によってどのように表されているかを考えさせた。このことで、大げさに言えば、経験の切り替えにつなげていきたいと考えている。

観察者：学生の反応はいかがか？

授業者：日本語を考えてみたいと思ったという感想もあるが、よくわからなかったという反応もある。私は、一人でも面白いと思ってもらえたらいいと思う。それが次の時には二人、三人に増えるといい。感想で一人は面白かったと書いていた。やってみて少しではあるが、学生にいいことがあったのだと、私自身勇気を与えられた。

観察者：I モード、D モードについては？

授業者：すでに 3 回くらい説明している。折に触れて、言っている。図表も説明をしている。しかし、感想には、何回聞いてもよくわからないと書いている学生もいる。今後も折に触れて出していくつも

6. 日本語はIモード中心 英語はDモード中心

中村[芳久](2004: 33-48)によれば、

日本語はIモード(Interactional mode of cognition)
英語はDモード(Displaced mode of cognition)

の認知プロセスを強く反映する。

但し、両言語においてこのモードの切り替えがあることも指摘する。更に興味深いことに、英語の古英語から現代英語への発達、そして子供の言語の発達も、IモードからDモードへのシフトとして見なされることも述べられている。

学生番号	
名前	
コメント	日本語が英語に、英語が日本語にせれる際、どのような弊害があるのか、について。つまりIモード、Dモードを確認することで、英語を言葉に好際にどのようなイメージでいんばいいか、ということも学ぶ機会になった。英作文と好際に意識して書いたS変子が好-と見えた。
	H28年 10月 25日 4時限

りである。そうすることで日本語のように近場で当事者として事態を認識するだけでなく、少し離れて、事態認識する自分を他者、他人として見るができるような感覚を培いたい。

観察者：45人の授業は、学力差や興味にかなり差がある。その全員に向けてターゲットを絞ることは難しい。知識も必要であり、ものの見方も身に着けてほしいが、なかなか学生が理解できない。

授業者：基礎、基本だけをやると授業が単調になってしまう。語学の学習は、自己学習ができないとその学習は伸びない。「学ぶことを学ぶ」、学び方を人から盗むということができないといけない。私も学び方を提供できなければいけない。ひいては自分の経験を切り替えていく力によって、また他者性を自分の中に持ち込むことによって、これから世の中を生き抜いていく力になると考えている。言語を深めることは人間性を深めていくことでもある。取り上げる内容は難しいかもしれないが、すぐに分かる必要もないので、言い続けていきたい。

観察者：学生のレベルにもよるが、教師が一人よがりになってはいけない。我々がどのようなスタンスで授業に取り組んでいくか、考えていかなければいけない。

授業者：教師である自分が、授業で自分の好きなことをする、自己満足的なことをするというのは、学生にとって、あるいは彼らの将来にとって、どういう意味があるのか、反省的に考えなければならない。

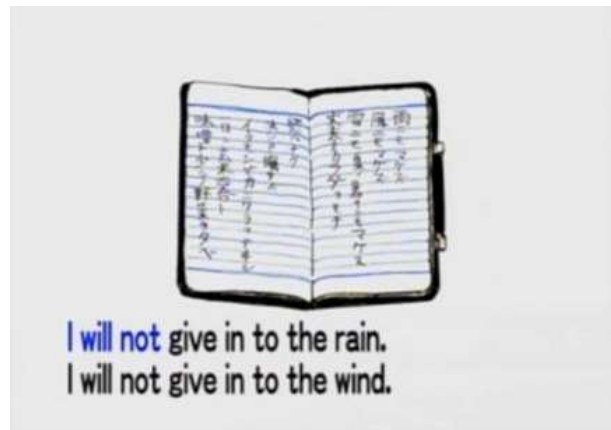
観察者：取り上げられた素材は、日常会話から格調高い演説、宮沢賢治の詩の翻訳と幅広いが、どの程度学生が理解できるだろうか。

授業者：日常言語でも、政治家の答弁は文学テキスト以上に厳しいものがある。日常言語というのはどのくらいの文脈が含まれているのか際限がない。日常言語だから浅い、文学だから深いとは思っていない。むしろその中の共通したものを気付いてほしい。ただ、今回は、量が多すぎて消化不良になったのではと反省している。

観察者：日常言語と文学がつながっているというのは、面白い。会話のやり取りがあまりなかったが、文章を区切って発音するのは学生にとってもよかった。単純に音読するというより効果的ではなかったかと思う。人間の思考の単位は、句や節という単位で結びつくということもある。区切って発音したのは学生にとってもやりやすいのではないか。

授業者：音読、いわゆるフレーズごとに発音させるフレーズ・リーディング、また時にはシャドーイングも行っている。目だけで声に出さないと長期記憶に残りにくいし、身体を動かさないと元気も出ない。また、なかなか時間を取れないが、個別に3行4行を学生に読ませることもある。感覚(言葉の背後の心的態度、感情)をつかむということに注意している。個別に指導をすることができればいいが、なかなかそうするゆとりがない。

観察者：学生が興味をもちそうなトピックを入れて、それとつなげていけるといいのではなかろうか？そういった要素があれば、授業に活かすこともでき、歴史や文学とつなげることができるのではなかろうか。



【宮沢賢治】雨ニモマケズ (Ame ni mo Makezu) 英語版 -- I will not give in to the rain
<https://www.youtube.com/watch?v=AieSqkpawG4>

授業者：学生が、何十年も生きてきた人間が、何を考え、何を思っているのかを考えてもらうことも重要であると考えている。私がこだわってきたのは、英語学・言語学であり、英文学である。学生の目線に降りていくことも大事であるが、年齢の違う人が何を考えているかを考えることも、他者性の一つであると思っている。もちろん若い人たちが何に興味があり何を大事に思っているのか、その気持ちを追体験できる柔軟性、自分自身の経験の切り替えもできないといけないと考えている。